

「研究論文」

韓国と日本の小学校の授業と教員の認識の比較を通じた

デジタル時代のリテラシー再考

徐承我（長崎大学大学院教育学研究科）¹

前原由喜夫（長崎大学教育学部）²

한국과 일본의 초등학교 수업과 교원의 인식 비교를 통한

디지털시대의 리터러시 재고(再考)

요약

학교에서의 수업과 학습에 있어 디지털 도구의 사용이 당연해진 오늘, 아이들이 사회에서 통용되는 리터러시(독해력 혹은 이해력)를 획득하려면, 어떤 교육적 방안이 필요한 것일까. 본 연구의 목적은 한국과 일본의 초등교육 비교를 통해 디지털 시대의 리터러시의 의미와 교육현장에서의 지도법을 재고(再考)하는데 있다. 한일(韓日) 초등학교 수업을 비교한 결과, 일본의 수업은 ICT 기기의 활용이 적고 판서 중심의 수업 구성에, 아동들이 판서를 베끼거나 자신의 생각을 언어화하여 노트에 기록하는 활동이 중요시되는 것을 알 수 있었다. 또한 일본 초등 교원과의 인터뷰에서, 교원들은 고학년에서 생기는 학력차를 줄이기 위해서, 아동들의 구체물 조작이나 노트 필기 활동이 중요하다고 생각하는 것을 알 수 있었다. 디지털도구의 무비판적 많은 사용은 아동들의 리터러시 육성에 있어 반드시 긍정적으로 작용하지 않음을 시사한다. 이 밖에도, 한일(韓日) 초등학교 수업과 교원의 인식 비교에서 공통점과 차이점을 찾아, 앞으로의 시대의 리터러시 교육에 대하여 깊게 고찰하였다.

要約

学校での教授と学習においてデジタルツールの使用が当たり前となった今日、子どもたちが社会で通用するリテラシー(読解力あるいは理解力)を獲得するためには、どのような教育的方策が必要だろうか。本研究の目的は、韓国と日本の初等教育の比較を通して、デジタル時代のリテラシーの意味と教育現場でのリテラシーの指導法を再考することである。韓日の小学校の授業を比較した結果、日本の授業は ICT 機器の活用が少な

¹ Seo, Seung ah (서승아) ; 教員研修留学生。現所属 : 韓国ケボン小学校

² Maehara, Yukio ; 責任著者 (ymaehara@nagasaki-u.ac.jp)

く板書中心の授業構成で、児童たちが板書を写したり自分の考えを言語化してノートに書いたりする活動が重視されていることがわかった。また、日本の小学校教員へのインタビューから、教員たちは高学年で生じる学力差を小さくするために、児童たちの具体物の操作やノートへの筆記活動が大切だと考えていることがわかった。デジタルツールの無批判の多用は子どもたちのリテラシーの育成にとって必ずしもプラスに作用するわけではないことが示唆される。この他にも、韓日の小学校の授業と教員の意識の比較から共通点と相違点を見出し、これからの時代のリテラシー教育について考察を深めた。

1 はじめに

21世紀に入って20年余りが経過した今の社会を表現する言葉は、第4次産業革命、Society 5.0への過渡期、超VUCA時代などいくつもあるが、それらに共通する認識はデジタルテクノロジーと人工知能(AI)を基盤として急速に変化する時代だということだ。誰もがインターネットを通じてさまざまな情報を簡単に入手できるようになり、IoTやRPAといった技術が日々の家事労働や単純労働を軽減し、人々の生活がより便利で豊かになったのは間違いない。さらに、COVID-19感染症の世界的流行によって、学校教育現場でも子ども一人ひとりにパソコンが貸与され、インターネットを活用した非対面型の遠隔教育を行い、同時にデジタルトランスフォーメーション(DX)による授業や業務の効率化を促進する機運が高まった。子どもたちも多彩なオンラインコンテンツを活用して、自分自身の理解度や習熟度に応じた効率的な学習を行える機会が増えた。

しかしながら、生活の急速なデジタル化が人々に恩恵ばかりを与えてくれるかと言うと、それは定かではない。あらゆる情報を手軽に入手できる一方で、私たちはすさまじい速さで流れる巨大な情報の渦の中で、数多くの知識や情報の真偽を判断し、多種多様なテキストを効率的に読解し、既存の知識や概念を再構成して新たな価値を生み出すという能力が要求されている。「デジタルネイティブ」と呼ばれる若い世代が、そのような批判的思考力、読解力(リテラシー)、創造力を身につけているかと言うと、そうとも言えない。例えば、OECD(経済協力開発機構)によるPISA国際学力調査において、韓国と日本はともに読解力、数学、科学のすべてにおいて上位に位置し続けてきた。しかし、社会のデジタル化が著しく進展してきた2010年代—2012年から2018年にかけて一両国ともすべての科目の得点が低下し続ける傾向にあった。OECD加盟国平均値も低下傾向にあったものの、読解力に関しては両国ともOECD平均値の低下よりも明らかに大きな割合で低下していたのである(OECD, 2019a; 付表1参照)。デジタル時代の子どもたちのリテラシーは、このように楽観視ができない状況にある。そこで私たちは伝統的な学校の対面型教授学習システムから抜け出し、未来の新たな形の学校教育、デジタル時代のリテラシーについて真剣に考えていかなければならない。

その手がかりを得るべく、本研究では韓国と日本の初等教育の比較を通して、デジタル時代に必要な資質とリテラシーを考察し、それらを備えた子どもを学校

教育の現場でどのように育てていくべきかを議論していく。本研究では日本の小学校教育の現状を把握するために、長崎大学教育学部附属小学校（以下、附属小学校）で授業観察と教員へのインタビューを行い、第一著者が現職として従事する韓国の小学校教育との比較を行った。

2 小学校の教室構成の比較

附属小学校の一般教室は、廊下側の壁がなく、教室と廊下の区分が明確ではない構造になっている。児童は廊下にある個人ロッカーに自由に行き来できる開放的な構造である。しかしこれは附属小学校が研究校であるため、多くの教員と教育実習生が授業場を随時参観できるように設計されたもので、ほとんどの日本の公立小学校は韓国と同じ四角形の教室構造を持っている。

日本の小学校は施設や教室の環境などは韓国の初等学校と類似した点が多いが、韓国の教室には見られない構成上の特徴が2つある。

その1つ目は教師機の位置と使い方である。韓国では授業や業務処理に使用されるパソコンやテレビなどのデジタル機器のほとんどは教室の前方に置かれている。教室の前面にある教師机を使って授業や児童の指導、その他の事務作業が行われる。一方、附属小学校の教室の前面には黒板、小さな教卓、テレビなど必要最小限のものだけが配置されていた。教師机は教室の後方にあり、ここで宿題のチェックや個別の指導が行われる。教師が授業する場所（教室の前方）と児童たちの個別指導や業務を行う場所（教室の後方）が分離されている。さらに課題の点検や授業準備などの学習に関わる業務以外は、職員室（教務室）等で処理することで、**授業中の全体指導と個別指導、授業中の学習指導と授業外の事務作業などを空間を区分して処理している。**

2つ目は教室前後の黒板および掲示物の構成と活用方法だ。韓国では教室の前面に黒板、テレビなど学習に使うデジタル機器があり、それと共にお知らせや学習案内を掲示するための掲示板がある。前面にある掲示板はすべての児童たちが常に見ているため、学級生活にとって重要な事項を周知するために使う。教室の後方にも掲示板はあるが、それは主に学級および生徒たちの学習成果物を掲示するために使う。附属小学校では教室の前面には真ん中に韓国の一般的な黒板よりも広い黒板とクラス目標（級訓）、テレビなど最小限の物だけを置いており、お知らせや学習記録物などは教室後方の黒板と掲示板に掲示していた。これは**教室前面の掲示物を最小化し、児童たちが授業と学習活動に集中できるようにするための工夫**である。実際、児童の席から眺めた教室の前面は、授業内容が記録される黒板しかほとんど目に入らない。教室の後方には学級活動上の記録物（学級での役割や児童たちの活動記録など）と児童たちへの教師の応援の言葉を掲示することで学級内の共同体意識と所属感を高められるようにしていた。

以上の日本の教室構成は、児童たちが目の前の学習に没頭できるよう緻密に考えられたものだと言える。

3 小学校の授業の比較

2021年12月14日と16日の2日間、著者らは附属小学校で計6回の授業を参観した。1日目は6学年理科(科学)、5学年算数、5学年国語授業を、2日目は4学年算数、4学年国語、3・4学年複式学級の理科の授業を参観した。参観したクラスは全部別々のクラスだった。授業は各教室で45分間行われ、理科の授業だけ理科室(科学室)で実施された。著者らは各授業に観察者として参加し、教科授業での指導方法と児童たちの学習する姿を中心に観察を行った。

<理科の授業>

理科の授業が行われる理科室は、児童用の実験テーブルと関連道具が用意されており、理科に関連した生物および学習資料が随所に配置されていた。

教師は単元の構成を考えて学習する内容や実験によって「めあて」を決め、段階的(大めあて—中めあて—小めあて)に分けて提示した。参観した6年生の授業は「6つの液体を識別せよ」という単元の大きなめあてから、「水酸化ナトリウム水溶液の特徴」、「中でも金属を溶解できるかどうかを調べよう」といった流れで段階的にめあてを導出し、今回の「水酸化ナトリウム水溶液は金属を溶解させることができるかどうかを調べよう」という本時の学習目標にまでつながった。1つの単元の中で内容と実験が自然な流れで連結し、児童たちも先日の学習内容を考えながら自ら今回の実験を計画し主体的に参加していた。

児童たちは授業に参加しながら、今の実験や活動が単元の内容の中のどの段階であるか、以前と以後の学習とどのようにつながるのかを明確に認知していた。教師は学習のめあてと仮説設定、実験結果など授業の流れがわかるように黒板に記録していき、児童たちもノートに自身の実験内容と結果、わかったことなどを記録した。1つの学習のめあてを達成するための実験と学習活動は、現象の観察、実験構想と実践、結果など内容のまとまりごとに余裕をもって進行された。以前の実験で経験したことを今回の学習や知識と関連させ、児童たちが直接実験結果を予想して参加する姿から、児童たちが学習過程に主体的に参加しながら思考していることがうかがえた。

<算数の授業>

算数の授業は教科書の問題を解いて概念を身につけるのではなく、教師が算数教科の内容を分析して積極的に再構成した資料を使って授業が行われた。5年生と4年生の授業を参観したが、どのクラスも教科書が必要ないくらいの活動であった。「人々が集まって『HOKUTO』という文字を表現するには、各文字に何人の人が必要だろうか」、「長崎の女神大橋の長さとはどれくらいだろうか」のように、児童たちが日常生活で接することのできる身近な場面から問題を発見し、解決方法を算数的に探求していた。問題解決方法を考える時には黒板にある棒、ステッカーなどの具体物を利用したり、「算数の道しるべ」という教材を参考にし

ていた。「算数の道しるべ」は附属小学校独自の学習資料であり、数学的問題解決のための多様な方法とアイデアを図式化して整理したものである。数学的公式とは違い、代数、幾何など多様な領域で問題解決のために使えるアイデアを整理したもので、学年が上がり新しい方法を学ぶごとに、使える“道具”が増えていく。具体物とこれまで学習して身につけてきた「算数の道しるべ」を活用して解決方法を十分に探求し、ノートに文字と数、記号などで表現したり、自分の解決方法を学級の友人たちと共有して学習を深化させていた。個人的に問題解決を考えるとき、難しく感じる生徒は教師から追加のヒントを受けて考え、クラスで学習内容を整理し、解決方法を共有する時に無理なく理解して学べるようにする。橋の‘長さ と高さ’で始まった問題が自然に橋を成すワイヤーの‘厚さ と個数’などの新しい問題に拡張し、後続の学習への動機づけにつながっていた。

<国語の授業>

国語の授業は教科書の文と一緒に読んで考えを交わす活動で授業が行われた。国語だけは教科書の題材文も板書もノート筆記も縦書きをしていた。6年生は題材文が長くて一度個人的に文を読んでからその内容に関して話し合うことになったが、その時デジタル教科書を使って一緒にページを見ながら話すことができた。参観の中で唯一デジタル機器を使った授業だった。文を読んだ後、自分の考えを文章で表現する機会を十分に提供し、黒板の板書で自分の意見と一致するところに名札を貼りつけて自分の考えを簡単に表示したり意見を共有できるようにしていた。意見共有の後、児童は考えを再考したり修正した意見を表現して理解を深めた。4年生の国語の授業も文を読んで学習問題に対する自分の考えをノートに記録し、発表しながら考えを共有して授業がおこなわれた。今回の4年生の授業は知識や技能ではなく言葉の面白さを感じて表現する内容だったので、教師は児童の多様な反応を引き出す発問を行い、受容的な雰囲気でも児童たちも積極的に発表して授業に参加する姿を見せた。

附属小学校の3～6年生の国語、算数、理科の授業を参観し、日本の小学校の教育環境および学習実態と授業方法を調べた。授業は基本的に黒板を使った指導が多く、教師は自ら製作した写真や文章などの貼付資料を活用し、授業の内容の全過程が見てわかるように構成した板書で授業指導をしていた。板書には授業のめあて、授業中の活動や相互作用の痕跡が残っているので授業内容と思考の過程が可視化されており、児童たちは授業の内容と過程を何度も振り返りながら学習することが可能だった。教師が板書をする時、児童たちもノートに自分の考えを記録して整理したり、学習を深めたりすることができた。

附属小学校の授業は教師の授業研究を土台にした緻密な計画と児童たちの積極的な参加を基本として、児童たちの主体的な学習を引き出すために工夫されており、日常の授業でリテラシーを育てることができるよう組み立てられていたと

言える。韓国の初等教育の授業と比べたときの相違点として以下の3つの特徴を見出した。

第一に附属小学校の授業は教科書の使用が多くない。文学作品が載っている国語以外は授業中に教科書を見ることがあまりなかった。教科の教育課程と学習内容を教師が積極的に再構成して授業をするため、教科書より教師の発問や板書、教師と児童のコミュニケーションがより重要だった。韓国の小学校で教科書は授業の補助資料とされているが、大体は教科書の内容を中心に学習を行い、教科によっては補助教科書が提供されたり補充資料が教科書に含まれているため、授業に教科書を積極的に活用する。韓国では教育課程の再構成は教科書での学習で、教師の判断によって題材および活動を構成する程度が多い。日本では教科書よりも教育指針に準じて教師が研究し準備した教材で授業のめあてを決めて学習する。教科内容の積極的な再構成があるだけに、児童たちも自分が慣れているテーマや素材に関心を持って参加するが、再構成の主体である教師の力量に左右される。

第二に、授業中のICT機器の活用度が低い。附属小学校の授業は教科書、ノートのような基本的な学習道具と教師の板書、貼付資料などを利用して授業が進行していた。国語の授業で題材文と一緒に読むためにデジタル教科書を使用したこと以外にはデジタル機器を使用したケースは見られなかった。韓国の場合、授業でマルチメディア資料をよく使うのでデジタル機器の使用が多い。韓国の初等学校の授業では児童たちの興味と集中を高めたり、授業や学習を効率よくするためにICT機器を使用するが、附属小学校の授業はICT機器の使用がほとんどなかった。理科の授業で教師がする実験を観察するために30人ほどの児童が教師周辺に集まって観察したり、国語や算数の授業で黒板に貼る資料を手作りしていたり、ICT機器を使えたらもう少し効率よく授業準備ができたり、効果的に学習ができそうな場面があった。授業や学習のいろんな場面でICT機器を適切に使えば児童たちの集中を高められるので、幼い学習者の未成熟な集中力を補完することができるだろう。しかし、相対的に刺激的で変化が速いデジタル機器の特性上、授業内容と流れを理解しながらテキストに集中して深い思考を引き出すことは難しくなるかもしれない。

第三に、授業での主な学習形態として、教師と児童の全体学習、および児童の個人学習が一般的だった。日本の小学校では概して教師中心に授業が行われるため、児童同士の活動や相互作用は少なく、教師と児童あるいは教師を媒介に学級の児童たちの考えを表現して分かち合う全体学習とノートに自分の考えを記録し整理する個別学習を中心に授業が行われていた。韓国の場合、授業活動に児童の相互活動が多いため、全体、個人、小グループ、ペアなど多様な学習組織での相互作用を大切にする。韓国では学習の流れから全体学習で内容と概念を知り、小グループ活動を通じた児童同士の相互作用を終えた後、全体的に意見を総合して学習を整理するのが一般的である。

4 授業の方法とリテラシーに関する教員の認識の比較

附属小学校での授業参観後、現在の日本のデジタル時代に備えた小学校教育及び教師の認識等を調べるために小学校教員へのインタビューを実施した。調査対象は附属小学校に在職中の3人の教員を対象とし、以前参観授業を担当した2人の教員を含んでいた。3人の教員はいずれも附属小学校勤務7年以上、総教育歴10年以上のベテラン教員で、インタビュー当時、教員A（男性）は6年生、教員B（男性）は5年生、教員C（女性）は2年生の担任を務めていた。国語、算数など本人が集中研究する教科に対する知識にもとづいた専門的な意見と考えを聞くことができた。インタビューはZoomで実施され、事前に案内した質問項目に答えて意見を交わす形式で、2022年2月16日に約90分間にわたって行われた。

<インタビュー調査の構成>

事前に附属小学校側に渡したインタビュー項目は大きく3つのテーマ計10個であった。具体的には、授業参観後の問い合わせ事項を含め、(1) 授業構成および指導方法に関する質問4項目、(2) デジタル時代の読解力に対する認識と実態に関する質問4項目、(3) その他児童の指導に関する質問2項目で構成した。以下では「小学校におけるデジタル時代のリテラシー教育」に特に関連すると思われる部分だけを抜粋して、韓国の初等教育との比較を議論していく。以下、インタビューの質問と回答の括弧内の言葉は著者らが加えたものである。

<板書中心授業の核心とICT機器活用に対する認識>

授業参観でわかった附属小学校の授業の特徴の1つは板書中心の指導だ。教師は授業ごとに教室前面の黒板いっぱい授業の全過程を記録し指導していた。当該単元と今回の学習のめあてから主要な活動および児童たちとの相互作用、学習のまとめまでの内容を含む構造化された板書は学年と科目に関係なくすべての授業で共通して現れた。板書は教室での最も基本的な指導方法として韓国の学校でも使われるが、最近では授業の効率を高めるためICT機器とマルチメディア資料の使用が多くなり、板書の量が減って使い方も変わってきた。授業について十分研究し構成された板書は授業中にも多くの時間や努力を必要とし、文字で学習内容を伝えるため、教師中心の静的な授業になったり、児童たちが興味と集中力を失いやすいと考えられる。それでも板書指導に注力する日本の教師たちに板書指導の要点やメリットを尋ねた。

質問：板書するとき注意しているのは何ですか？

教員A：国語科の場合は縦書きで板書していくことになりまますので黒板の右側の方から左側の方にかけて学習の流れに沿って板書していくように考えています。1時間の中で右側から左側にかけて時間の流れとともに考えることがそこに現れるように計画して板書しております。

国語科の場合，児童たちの多様な意見と考えを共有するため，それを黒板に移す過程が難しいが，学習目標と関連した有意義な反応を選んで記録しておく，授業の後半で学習内容を振り返るとき役に立っていた。板書には大きく印刷された写真や手書きで書いた文章なども貼って資料として活用していたが，授業でたった数回だけの使用のために準備するのは大変だと思い，次の質問を行った。

質問：全部板書だけよりも貼る資料を用意して黒板に貼ったほうが，生徒の集中力，黒板への注意は持続しますか？

教員 A：そうですね。集中力もそうですし事前にそれ（貼る資料）を準備してあることによって同じ物を見ながら話ができたり，書き込んだ物が残っていきますのでそういった物を教室に掲示することで話がつながってきますので，板書に使うことプラス授業前後の学びのつながりっていうものを作っていくためにも活用しています。

教員 B：算数のほうで板書に準備する資料としても図とかグラフというものを拡大した資料を準備して提示をする事がよくあります。デジタル教科書がパソコンにも入ってますのでパソコンで提示することもできますが，やっぱり直接操作をしたり図の中に書き込んだりっていうのが子どもも容易にできますので，印刷したものを子供たちが操作をしたり書き込んだりしながら共有することができるようにしています。

板書は学習目標からまとめに至るまでの授業の全過程を簡単に把握することができ，授業中にしばらく集中を失っても板書を見て現在ほどの段階にあるのか学習の流れをすぐに見つけられる。板書中心指導の核心は授業の全体的な流れを把握できるように記録し，児童たちがそれを書き取り，以前の学習と関連付けて自ら学習を得られるように案内することだと考えられる。教師が板書をする際は，児童たちから目を離すことになるので集中力を失うのではないかという憂慮とは逆に，児童たちも自分の考えをノートに記録し学習に参加していた。一見非効率的に見えるが，教師が板書をする時に児童たちも時間をかけて記録し，考えを整理することで集中して深く思考できる態度を育てることに影響しているのではないだろうか。授業中に ICT 機器を使用した授業は少なかったが，ICT 機器を使用した指導と効果に対しての認識を尋ねた。

教員 C：図工科で作品を作るときに途中経過を記録するという面ではすごく ICT 機器を活用する価値があると感じています。絵を描くにしても子供たちが 2 時間目，4 時間目で描いてる経過を記録することで自分がどういうふうに作品を仕上げていたのかなということを自分自身で振り返ることができたり，子どもたち同士でそれを見る事で，できあがった作品じゃなくてその過程も振り返ることができるっていうのは ICT 機器があるからこそと感じています。

授業中の ICT 機器の価値については、学習の過程を記録し、振り返る用途と認識していた。これは図工のような実技教科だけではなく、国語科は自分の記録を残して学習後どれくらい変化があるか調べたり、多数の資料の中で必要なデータを選別し抽出する能力を育てること、算数科は現実に操作が難しい場合（例えば三次元の立体を透過して観察するなど）に、ICT 機器を使って理解を補助するために活用するとのことであった。韓国の小学校では学習の興味付けから、学習内容の伝達、学習に対する理解の確認および点検まで多様な場面で積極的に活用されている。韓国とは大きく異なる様子だと言える。

＜デジタル機器の使用による学習能力の変化＞

デジタル機器の使用が増えるにつれ、学習でも直接体を動かしたり操作すること（特に鉛筆を持って文字を書く活動）が減ったが、このような変化が児童たちの学習能力や表現力にも影響があるだろうか。昔と比べてクラス内の学力差と学習能力の変化があるかという質問には、次のような回答が得られた。

教員 B：昔と比べていうと、そこまで感じないですけども、学年間の差を見たときに高学年になるうえで特に算数とかは前までの学習とのつながりっていうのが大きいので、そういう所をつまずきがある子はやはり高学年でも同じ所をつまずいてしまうっていうのは日々感じながら指導しています。そのような子供はデジタル（機器）の利用などもあったんですが、見てわかったつもりになるんじゃないくて、それを説明したりとか自分で絵や図を書いてみたりする事を大切にしたりとか、また高学年とは言え手を動かして計算だけで終わるんじゃないくて何かものを作ったり、具体物の操作を大切にしながら理解を促していたりします。

教員 A：国語では書く力、手を動かしてやっていくのが大事なところもありまして、ICT 一辺倒にならないように実際手を動かして自分の手で書くこととか、その材料を探していくことだったりするのが書く力を身につけることにつながるのかと思うところです。

以前と比べて学級内の学力差には大きな変化がないが、高学年ほど学力差が広がることは実感しており、このような学力差解消のために手を動かして文字を書いたり何かを作り出し具体的に操作しながら理解を深めるよう指導しているとのことだった。学校ではデジタル機器を活用した学習の個別化、学力差の減少等が期待されている。だが、児童たちの発達段階を考慮する時、具体物の操作活動と手を使って書く力を育てる指導が疎かにならないよう附属小の教員たちは強調していた。デジタル機器の便利さと効率性に押され、直接的な操作活動と手書きが減ったのは事実だ。韓国の小学生は、書く機会が減るにつれ自然に筆圧が弱くなり、字を正しく書くことが難しくなっている。学習の効率と利便性より生徒の発達段階を考慮した適切な教材の提示と学習指導が必要だと考えられる。

<デジタル時代のリテラシー（読解力）に対する認識>

刻々と変化するデジタル時代に必要とされる学習能力も変わってきているが、今後の時代を生きていく児童たちはこのような変化に十分対応できているだろうか。特に 2020 年から COVID-19 感染症によって非対面オンライン授業の比重が高くなるにつれ、オンライン上でのコミュニケーションのしにくさや授業内容の理解不足による指導の困難はさらに大きくなったが、日本の子供たちはどうだったのだろうか。附属小学校の教師たちに児童たちのリテラシー（読解力）水準と今後の時代に必要な学習能力に対する質問を行った。

教員 A：(子どもたちの読解力は)それほど変わらないって言うのが実際のところ
です。読解力そのものは落ちてないと思いますが、求められる読解力が少し変わ
ってきてるところがあるのかなと思うことが一つありまして、今まで従来の深く
読む、じっくりと長い文章を読み味わうことも大事でこれはこれで変わってい
かないと思いますが、一方でたくさんの情報の中から必要な情報を選びだしたり複
数の情報を比べて自分の考えで作り出したりすることが、これからより一層求め
られるかなと思います。(…中略…)文章問題に関して言いますと必要な情報を選
びだして自分なりにイメージして問題解決に向かっていく、そうした新しい読解
力に関わる部分が多いかなと思いますので区別してじっくり読む、熟読するだけ
ではなくて簡単に読む、必要な情報だけ選び出すことができる、そういう力を合
わせて場面に応じて読解する力を身につける必要があるかなと思いますので、そ
ういうところを意識しながら読む(ことが大切)。(…後略…)

附属小学校の教師たちは以前と比べて児童たちの読解力の低下は体感できな
いと答えた。ただし読解力の重要性と今後の時代に必要な読解力の意味につ
いては、韓国で教員をする第一著者と共通の考えを発見することができた。今
のように長い文を読んで深く理解し、思考する学習も重要だが、今後の時代
には児童たちが多様なところで数多くの情報に接するようになるので、その
中から必要なものを選んで正しく理解し判断し表現する能力(≡批判的思考力)
が今後の時代に要求される読解力になるという点に共感することができた。最
近の児童たちの語彙力の不足と概念のイメージ化の未熟さが読解力とコミュ
ニケーションにも影響を与えており、それと同時に接するテキストが多彩に
なるにつれ、今の時代に要求される新しい形の読解力とそのための指導が必
要だ。既存の読解力と新たに要求される読解力を状況に合わせて柔軟に指
導しなければならない。

質問：算数科は文章問題を理解するにはイメージできるかどうか、図に表せる
のができるかどうか大切だと(前の質問の回答で先生は)言いましたが、それ
を鍛えるために使ってる方法とかありますか？

教員 B：本校の算数の特徴でもあるかも知れないですけど文章問題を出してその

問題を解こうということではなくて日常の場面から問題を見いだして、それを算数問題で解こうと。授業の導入でも写真を出して子どもたちとやり取りをしながら‘こんなことが問題だね、じゃこういうことを解決していこうか？’(…中略…) だけどあまりスタートの中で言葉が現れないことがこれまで多くありました。なので読解力っていうことも関係しているところでは、日常の中での問題場面は写真や具体的場面などを提示して出てきたものを、数字であり気付いたことなどを板書の中に残して、どこが疑問になっているのか、どこをはっきりさせればこの問題を解決できるのかというものを一回整理していくので、その言葉と具体物、図式などを黑板に残していくことで、言葉とイメージっていうものがしっかりつながって、これからもイメージできるようになるし、イメージされたものが言語化されていくんじゃないかなということでも高く意識して行っているところなんです。

算数科の場合、「文章が読める」というのは「イメージができる」ということで、問題を読んで数直線、関係図などを頭の中に思い浮かべたり、直接描いてみて文章をイメージ化したり、逆にイメージを見て数学的に表現する練習を通じて数学的感覚を育て読解力を向上させることができるとの回答であった。

5 本研究のまとめ

本稿では日本の小学校の授業の観察と教員へのインタビューを行い、デジタル時代に求められるリテラシー教育の形について考えてきた。韓国の小学校教育と比較したとき、現在の日本の小学校教育の特徴は以下のようにまとめられる。

まず日本の小学校では、児童が授業に集中できるよう教室の物の配置や構成が最適化されている。教室前面の掲示物の最小化や教師機の後方配置、そして教員の事務作業を教室から切り離すことによって、子どもたちの集中を授業以外に逸らさないよう工夫されている。授業は1人1台パソコンなどのICT機器をあまり使わず、黑板への板書を中心に行われており、児童の筆記活動と具体物の操作を大切にしている。手書きを大切にするのは、児童が時間をかけて板書を写したり自分の考えを言語化することを通して、日頃から深く思考する習慣を身につけさせるためだと考えられる。パソコンなどを考えなしに子どもたちに多用させることは、このような手書きのメリットを消滅させてしまうだろう。ただし、教員自身は授業の準備や実施においてももう少しICT機器を活用し、授業や学習の効率化を図るべきだとも思われる。日本の教員は世界の教員の中で最も労働時間が長いことは有名であり(OECD, 2019b)、ICT機器の活用は業務効率化のためにも必須である。そして、デジタル時代に必要な批判的思考力をもなったリテラシーを育成するために、国語や算数をはじめとしたあらゆる教科が取り組みを始めているのは、韓国と日本の小学校教育の共通点だと言える。今後は教育のデジタル化が子どもたちのリテラシーに及ぼす影響を、アンケート調査などによって実証的に検討していく研究が重要性を増すだろう。

謝辞

本稿は第一著者（徐）が長崎大学大学院教育学研究科に提出した教員研修留学生研修論文の一部を大幅に加筆・修正したものです。また、本研究の一部は JSPS 科研費 21K02563 の助成を受けたものです。本研究にご協力いただきました長崎大学教育学部附属小学校のみなさまに、改めて感謝申し上げます。まことにありがとうございました。

引用文献

OECD (2019a). *PISA 2018 Results: Country Note- Korea and Japan*.

OECD (2019b). *TALIS 2018 Results (Volume I): Teachers and School Leaders as Lifelong Learners*.

付録

付表 1. 韓国と日本の PISA2012 と PISA2018 の得点と増減率

| | PISA2012 | | | PISA2018 | | | 増減率 (%) | | |
|--------------|----------|-----|------------|----------|-----|------------|--------------|--------------|--------------|
| | 韓国 | 日本 | OECD 平均 | 韓国 | 日本 | OECD 平均 | 韓国 | 日本 | OECD 平均 |
| 読解力 | 536 | 538 | 496 | 514 | 504 | 487 | -4.10 | -6.32 | -1.81 |
| 数学的 リテラシー | 554 | 536 | 494 | 526 | 527 | 489 | -5.05 | -1.68 | -1.01 |
| 科学的 リテラシー | 538 | 547 | 501 | 519 | 529 | 489 | -3.53 | -3.29 | -2.40 |

Note. 2012 年から 2018 年にかけて、読解力に関して OECD 平均値が 1.81% 低下しているのに対し、韓国と日本はそれぞれ 4.10% と 6.32% という大きな低下を示していることがわかる。